

土木紀行

長浜大橋

愛媛県大洲市



1. はじめに

県内最大の河川であり、その名のごとく中流部においてひじのように大きく曲がりながら伊予灘に注ぐ一級河川肱川，その河口部に当たる大洲市長浜町にこの橋は架かっています。

全長226m，幅5.5m，昭和10年に架けられたこの橋は，国内現役最古のバスキュール式道路可動橋で正式名称は「長浜大橋」，でも，地元ではその姿から「赤橋^{あかばし}」と呼ばれています。

2. 町民悲願，画期的な可動橋

橋の周辺は，左岸は住宅密集地，右岸は役場や学校，商店街など町の中心地であり，橋が架かる前の兩岸を結ぶ手段は渡し舟しかなく非常に不便な状態でした。また，左岸側で三崎半島に至る海岸沿いに点在する集落も，当時は海上交通に依存するしかなかったため，海が時化ると陸の孤島となって，無理をした船による痛ましい海難事故が発生したこともあり，長浜大橋の開通による陸路の確保は住民積年の悲願でした。

一方，豊かな水量とゆるやかな流れを有する肱川は，この地域で舟運が重要な貨物輸送の役割を果たし，上流部からの木材・竹材の筏流しや流域の農林産物，木蠟，川砂利などを河口の港まで運ぶ川舟が頻繁に航行していました。

そのため，普通の橋ではそれらの運航を阻害してしまうことから，当時としては画期的なアイデ

アである舟運を阻害しない可動橋が計画されました。五連のトラス桁と二連の鋼桁からなる本橋梁のうち，右岸から3径間目が可動部分で支間長15.6m，可動桁の長さは18mであり，約54tにも及ぶ可動桁をスムーズに動かすために，橋の上に約82tの「カウンターウェイト」が付いています。

ちなみにバスキュールとはフランス語で，「跳ね上がる」の意味だそうです。

3. 町民に守られた赤橋

架設当時は，大きな船が来るたびに一日に何度も開閉していましたが，陸上交通の発達とともに次第に通過する船も減少，さらには，昭和52年に新長浜大橋が河口側に完成したことにより，赤橋は「撤去すべき」との議論が出たそうです。

しかし，旧長浜町が管理者の県に対し昭和50年，52年と陳情書を提出するなど，地元の強い熱意で保存が決まり，今も立派に生活道路として多くの車両や自転車，通学の児童生徒たちに利用されています。

かつて第二次大戦中には米軍機の機銃掃射を受けて，その弾痕が今も生々しく残る長浜大橋は，地元住民の橋への愛情に見守られ続け，平成10年に文化庁の登録有形文化財に登録，さらに，平成20年には経済産業省の近代化産業遺産にも認定されました。

長浜大橋は，現在も観光用として週に一度，点検を兼ねて開閉されています。開閉に要する時間

はおおむね3分、毎週日曜日の午後1時に「森の音楽家」のメロディーとともにその勇姿を見せてくれます。また、夏場はイルミネーションが施され、訪れた人々の目を楽しませています。

4. 肱川あらしと赤橋

毎年、秋から冬にかけて晴天の朝、大洲盆地で発生した霧が一気に肱川を下る「肱川あらし」と呼ばれる特有の気象現象が見られます。

巨大な雲海が河口を目指して奔流し、周囲をすっぽりと幻想的な雰囲気包み込むこの季節の風物詩ですが、白い霧と赤い長浜大橋とのコントラストは見応えがあります。

近接する山に、「肱川あらし展望公園」が整備され、標高160mの山頂展望台からこの肱川あらしを見下ろすことができます。

この展望台からは、朝の肱川あらしだけでなく、昼には肱川河口に架かる長浜大橋と瀬戸の島々の眺望が、そして夕方には瀬戸内海に沈む美しい夕日が楽しめます。

ぜひ、一度訪れてみてはいかがでしょうか。

【交通】

- ・車で：伊予ICから国道378号経由で約30分、大洲ICから県道大洲長浜線経由で約20分
- ・JRで：予讃線（海岸廻り）長浜駅から徒歩約10分

【参考文献等】

長浜町誌
大洲市公式HP

【問い合わせ先】

愛媛県南予地方局大洲土木事務所
TEL 0893 24 5121



写真 1 跳ね上げた状態の長浜大橋



写真 3 展望台から見る長浜大橋（左）と新長浜大橋（右）



写真 2 冬の風物詩：肱川あらし



写真 4 肱川あらしの中を通学する子供たち